「浄土真宗の教章（私の歩む道）」を理解するために

「浄土真宗の教章（私の歩む道）」を理解するために

浄土真宗の教章（私の歩む道）

宗名　浄土真宗

宗祖　親鸞聖人

（ご開山）

ご誕生　一一七三年五月二十一日（承安三年四月一日）

ご往生　一二六三年一月十六日（弘長二年十一月二十八日）

宗派　浄土真宗本願寺派

本山　龍谷山　本願寺（西本願寺）

本尊　阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）

聖典

・釈迦如来が説かれた「浄土三部経」

『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』

・宗祖　親鸞聖人が著述された主な聖教

『正信念仏偈』（『教行信証』行巻末の偈文）

『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』

・中興の祖　蓮如上人のお手紙

『御文章』

教義

阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還って人々を教化する。

生活

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歓喜のうちに、現世祈祷などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

宗門

この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

●もくじ●

「浄土真宗の教章（私の歩む道）」を理解するために

1、「浄土真宗の教章（私の歩む道）」制定の経緯……5

2、解　説……8

題号 8
副題 8
宗名 9
宗祖 12
宗派 13
本山 13
本尊 14
聖典 15
教義 17
生活 20
宗門 23

1、「浄土真宗の教章（私の歩む道）」制定の経緯

二〇〇八（平成二十）年四月十五日、立教開宗記念法要（春の法要）ご満座でのご親教で、ご門主から、新しく「浄土真宗の教章（私の歩む道）」がご制定になりました。

ご親教にてご門主は、

宗祖親鸞聖人の御誕生八百年・立教開宗七百五十年を控えた一九六七（昭和四十二）年四月、当時の宗門を憂えられた大谷光照門主が「浄土真宗の教章」を定められ、親鸞聖人の流れをくむものとして、心に銘ずべき肝要を示されました。以来四十年余り、そのご教示は、浄土真宗門徒の信仰生活の規範となってきました。

一方、宗門は一九四六（昭和二十一）年に制定された「宗制」を根本

にして活動してきましたが、このたび「宗制」が改正され、時代を超えた不変のことがらと時代に即応すべきことがらが整えられました。

それにともなって、新しい教章を制定いたします。

（『本願寺新報』二〇〇八〈平成二十〉年四月十五日 号外）

とお述べになり、また、

この「教章」は、わが宗門に集う方々に、ぜひ心得ていただきたい浄土真宗の要旨であるとともに、新たにご縁のできた方に、み教えを理解していただくための手引きでもあります。

とお述べになって、新しい「教章」についてお示しくださいました。

そして、

私たちは、近く宗祖親鸞聖人の七百五十回大遠忌をお迎えいたしますが、この大遠忌を機縁に、先人の方々が身をもって伝えてくださった親鸞聖人のおこころを深く受けとめ、浄土真宗のみ教えを混迷の時代を導く灯火として高く掲げ、人々に広く伝えながら、ともに世の安穏をめざして歩みたいと思います。

この「教章」を身近に備え、折りにふれて参照し、浄土真宗に親しんでくださるよう期待いたします。

と、この「教章」を大切にするべきと深い思いをお示しくださいました。

このように「浄土真宗の教章（私の歩む道）」は、二〇〇八（平成二十）年四月一日、宗門の最高法規である「宗制」が全面改正され、施行されたことを受けて、同年四月十五日にご門主によって新しい「浄土真宗の教章（私の歩む道）」が制定されました。

宗門の最高法規である「宗制」に根源を置き、宗門にご縁のある一人ひとりが、心得ておくべき浄土真宗の要旨を明確に示してくださったのです。今後はこの「教章」を大切にして浄土真宗に親しんでまいりたいものです。

2、解　説

題　号

「教章」の「教」とは、教法（きょうぼう）のこと、すなわち浄土真宗のみ教えです。

「章」とは、「文章」という熟語があるように、「あきらかにする」という意味があり、また「旗章（きしょう）」という熟語もあるように、「旗印（はたじるし）」という意味もあります。

例えば「風林火山」という旗を見ると、武田の軍勢だと一目でわかるように、この「教章」を見れば、一目で浄土真宗がわかる、というものです。

副　題

旧「教章」では、「私の宗教」と示されていました。宗教は、他人のためのものではなく、まさしく自分自身のためのものであることを明らかにしてくださいました。

このたびの新「教章」では、「私の」という主体的営（いとな）みであることは、そのまま継承されつつ、その主体的営為が、実践としてのひろがりを持ってほしいとの願いから、「私の歩む道」とお示しくださったのではないかとうかがえます。

「宗教」という言葉は語感が変わってしまい、良くない印象を持つ人が増えてしまいました。しかし「宗教」は人の究極的な問題を、その根本を解決する大変重要なものです。自分自身の生き方に即したものであることを、示してくださったと受け止めています。

宗　名

旧「教章」では、「浄土真宗本願寺派」と示されていました。これは、宗教法人法に基づく、宗派の正式名称です。

新「教章」では、これは〔宗派〕の項目として別立てで扱われておりますので、ここに言われる〔宗名〕とは、宗派の名称ではないということです。

つまり、ここでの「浄土真宗」とは、宗派の名称としてではなく、

浄土真宗をひらきつつ　（『註釈版』五九五頁）

と示された、言わば、教えの名のりです。

この「浄土真宗」という宗名は、教えの内容を示す名称でもあります。

仏教各派の宗名には、さまざまな付け方があります。例えば「天台宗」であれば、「天台山」という地名もしくは「天台大師」という人名に基づいてつけられたもので、「日蓮宗」であれば、日蓮聖人という人名によってつけられています。「華厳宗」なら、『華厳経』という正依の経典によってつけられた名称です。

これらに対し、私たちの「浄土真宗」は、教えの内容を表した名称とされています。

「教巻」には、

大無量寿経　真実の教　浄土真宗　（『註釈版』一三四頁）

と示され、また『御消息』には、

選択本願は浄土真宗なり　（『註釈版』七三七頁）

とあります。このように浄土真宗は『仏説無量寿経』そのものを表し、その中心の第十八願の救いそのものを表します。

また『御文章』「宗名の章」（一帖、十五）に、

自余の浄土宗はもろもろの雑行をゆるす。わが聖人は雑行をえらびたまふ。このゆゑに真実報土の往生をとぐるなり。このいはれあるがゆゑに、別して真の字を入れたまふなり。　（『註釈版』一一〇五頁）

と示されるように、雑行自力を認めないから「真宗」と名のれるのだという

意味です。私たちの自力でつくったものは、虚仮不実な行ですから、真実の名を冠することはできません。念仏も信心も本願力によって与えられるゆえに「浄土」の教えの中で、特別に「真宗」と名のることができるのです。

宗祖

ご誕生・ご往生、ともに本願寺派では、新暦に換算した日を用いています。親鸞聖人を宗祖と仰ぐ同じ真宗の中でも他の宗派では旧暦のまま御正忌を十一月二十八日で勤められているところもあります。

なお、旧暦と新暦には数十日のズレがありますが、歴史学などでは旧暦と西暦とを同じ年と見なして表記しています。ですのでご往生の年、「弘長二年」は西暦では一二六二年と表記されています。旧「教章」の古い版では、「一二六二年」となっているものもありますが、ご往生の年月日を新暦に換算すれば、次の年の「一二六三年一月十六日」ですので、旧「教章」でも途中からは「一二六三年」となっています。

旧「教章」との相違で言えば、「見真大師」の大師号が、新「教章」では記載されていません。これは、直接には、先の「宗制」改正を受けるものです。「宗制」では、なぜ言及されなかったかというと、立教開宗には直接関わらない事項だからとされています。

宗派

前述の通り、宗派の正式名称です。

本山

通称としての「西本願寺」は、旧「教章」と同様ですが、今回の新「教章」では、新たに「龍谷山」という山号が明示されました。

本願寺は、第十一代顕如宗主の時代に現在の京都堀川の地に移りましたが、それ以前は、大坂の石山本願寺であったり、山科本願寺であったり、たびたび移転を繰り返しています。本願寺の原初としては、覚如上人の時に、宗祖親鸞聖人の廟堂として建立されましたが、それは、京都東山の「䶮」の地にありました。

本願寺の原初の地を示す「龍」の字から、山号を「龍谷」とすることによって、本願寺派の本山を明確に示してくださったと言えるでしょう。

今日、我が宗門の関係学校は、全国に多数ありますが、その中には、京都の龍谷大学をはじめとして「龍谷」の名を冠する学校も少なくありません。「龍谷総合学園」という宗門関係学校の連盟もあります。その宗門校の名称の根拠を明示するということにもなり、浄土真宗の教えに基づいていることが明確になりました。

本尊

旧「教章」とまったく同じです。

「阿弥陀如来」は、言うまでもなく、覚体としての阿弥陀さま。木像や絵像としてのご本尊です。「南無阿弥陀仏」は、名号本尊としての六字名号で、どちらも正式な「本尊」です。

名号「南無阿弥陀仏」が本尊であるというのは、浄土真宗の大きな特徴です。

他宗の論理では、木像が最も詳細なお姿で、絵像・名号は、簡略化と思われがちですが、当流では全く同等です。

それは、本願成就文に「聞其名号」とあるように、私たちが直接出遇っている如来さまは、「南無阿弥陀仏」の名号だからです。そこには、私たちの信心としての帰命の「南無」まで用意してくださって、私のもとに来てくださる如来さまなのです。

だから、「南無」まで含めて本尊とするのであり、「阿弥陀仏」だけを本尊とするのではありません。私たちの出遇っている如来さまは、「南無」まで用意してくださった「南無阿弥陀仏」なのです。

聖典

旧「教章」では、「経典」として「浄土三部経」とされていましたが、このたびの新「教章」では、「浄土三部経」のほかに、「宗祖 親鸞聖人が著述された主な聖教」として、「正信偈」と「三帖和讃」が挙げられ、さらに

「中興の祖　蓮如上人のお手紙」として『御文章』が挙げられています。

これは、私たちの日常の勤行が、正信偈・和讃六首引・御文章拝読という形であるからでしょう。勤行に用いられ親しまれていることから、これらを「聖典」としてお示しくださったとうかがいます。

宗祖の主著は、もちろん『教行信証』で、教義体系としては『教行信証』を中心とすることは言うまでもありませんが、平素なじみの深い「勤行聖典」として「正信偈」を「聖典」として示されています。

また、「聖典」と似た意味の語に「聖教」があります。「聖教」としては、宗祖の著述をはじめ、七祖すべてにわたって、「宗制」では細大もらさず明記してあります。

今は、宗門において身近に普及しており、平素から勤行において親しんでいる意味において、「浄土三部経」・「正信偈」・「三帖和讃」・『御文章』が選ばれたということでしょう。

教　義

「教義」を一言で表すのは、実は至難の業です。『歎異抄』第十二条に、

本願を信じ念仏を申さば仏に成る。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。

（『註釈版』八三九頁）

というお言葉がありますが、簡潔にして要をえた、すぐれた教義表現です。「本願を信じ」（「至心・信楽・欲生我国」）、「念仏を申さば」（「乃至十念」）、「仏に成る」（「若不生者、不取正覚」）と、まさしく第十八願の法義の内容を的確に明示されています。

そこで、試みに、この『歎異抄』の文と、今回の新「教章」の文とを読み比べてみてください。そこから、この「教章」の意図が見えてくるように思うのです。

最初の二行「阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人

生を歩み」は、先の第十八願の内容です。さらに「この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり」は、第十一願の内容ですが、ここまでででしたら、『歎異抄』でも触れられています。ですが、「迷いの世に還って人々を教化する」の一段は、『歎異抄』にはない内容で、この第二十二願、還相回向の内容こそが、このたびの「教章」で、特に強調されたかったことではないかと思われるのです。

直接的には、曇鸞大師の『往生論註』末尾の三願的証に、根拠を置くもので、馴染みの深いものでは、「正信偈」の曇鸞章に、『論註』の義を簡潔に、

惑染凡夫信心発、証知生死即涅槃…第十八願…往相
必至無量光明土　…第十一願…往相
諸有衆生皆普化　…第二十二願…還相

と、示されています。この、往還の二回向が他力のはたらきによることを示してあるのが『論註』の義で、これを承けて、『教行信証』の冒頭に、

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。

（『註釈版』一三五頁）

とお述べになっています。このように「往相」「還相」の二回向が宗祖の教学の基本的骨格になっているのです。

一歳にも満たない幼児が亡くなったとします。お寺参りをしたこともなければ、一声の念仏も称えたことはない、そういう子は、浄土真宗以外の教えなら迷っているとしか言えないでしょう。でも、私が手を合わす身になれたのは、あの子のおかげと気付いた時、その子は還相の菩薩だったと味わえる世界があります。

もちろん、仏教は、死者の行き先を第三者的に論じ、成仏の可否を説明するものではありません。しかし、還相の菩薩と敬っていくことのできる道が、浄土真宗ならではの尊い世界でしょう。

生活

私たちの信仰生活について、具体的には「聴聞」（「阿弥陀如来のみ心を聞き」）と「念仏」（「念仏を称えつつ」）とが、生活実践であるとご教示くださっています。

浄土真宗は、他力の信心を恵まれるみ教えです。自分で考える信心や、自分でつくる信心では、他力ではありません。そして、自分でつくったものなら、迷いの因にしかならず、他力によって恵まれる信心だからこそ、仏因になるのです。

その他力の信は、聞くことによってのみ成立します。信心は心の領域ですが、心の領域であるにもかかわらず、私の心のはたらきをそのまま「聞」で語ります。それが、聞くままがそのまま信心であるという、聞即信の法義なのであり、浄土真宗は聴聞にきわまると言われる所以です。如来さまのよび声を聞き、如来さまの名のりのいわれを素直に聞くほかないのです。

この阿弥陀如来のみ心、阿弥陀如来の願いを聞かせていただく時、そこから「つねにわが身をふりかえり」、つまり、如来さまの智慧のひかりに照らされることによって、私の本当の姿、自己中心で深い闇をかかえた、恥ずべき身であることに気付き（「慚愧」）、また同時に、そのような私のために、常にはたらきつづける本願のお誓いの中にあったと気付く喜び（「歓喜」）、これが、私たちの信心の内実なのです。

厳しい自己内省と、救いの喜びとに支えられながら、返しても返しきれない如来さまの御恩に報いるためには、ねてもさめても、いのちのあらんかぎり、称名相続させていただきます。

聖道門の自力の難行は、まさしく命のぎりぎりまで追い詰めるもので、たとえば千日回峰行などは、平凡な生活をしている私どもには、とてもできるものではありません。しかし、この自力の行は、確かに難行ではありますが、千日目には達成というゴールがあります。しかし、私たちのご報謝には、もうこれで良いという終わりがありません。返しきれない報謝の生活です。その意味では、また別の厳しさがあると言えるでしょう。

そして、如来さまの智慧のひかりに照らされて、確かな方向性を見いだす

ことができた身ですから、もはや迷信に迷う必要はありません。「現世祈祷などにたよることなく」無碍の一道を歩むのです。

時々、名前の画数を気にして、名前の漢字を変える人が見られます。おそらくは、字画などの姓名判断によっているのでしょう。人生は自分の才能と努力によって切り開いていくものです。しかしその人生はさまざまな要因と条件との関わりによって、すべては成立します。ですから順調なときもあり、逆境のときもあります。

最近は、もう変わっているかもしれませんが、数年前、ある航空会社の飛行機に乗った時、座席番号が、三番の次が、なんと五番でした。その間に非常口があるとかいうのではなく、完全に連続した座席なのに、四番が飛ばされていたのです。想像に過ぎませんが、やはり「四」という数字が「死」を連想したからでしょう。

常識的に考えて、ひとたび飛行機事故がおこったら、四番に座っていた人だけが亡くなるということは、まずありません。飛行機は、金属の塊を空に飛ばすというほどの、いわば科学の最先端と言ってよいでしょう。その科学

の最先端において、いまだに「四」に対する迷信が残っているということは、迷信は、科学では解決し切れないものがあるということです。科学でも解決できない迷信を、まさしく横さまに断ち切っていくのが、浄土真宗の法義です。

こちらから祈り、こちらから願うのではありません。「必ず救う」という如来さまの願いを聞かせていただくのです。

宗門

如来さまから一味の信心を賜ったもの同士ですから、お互いを、ともにご法義仲間として敬い合って生きるのが、「同朋教団」です。

ともに等しく仏弟子ですから、私たちの法名には、みな「釈」の字を冠しています。これは、ともにお釈迦さまの弟子となることの名のりです。

お釈迦さまの僧伽では、弟子として入門した者は、みな等しく仏弟子として敬い合ったのです。

法名に「釈」の字をいただいている意味をかみしめ、ますます、御同朋の

こころを実践して行かねばなりません。

阿弥陀さまの智慧と慈悲によって救われた私たちですから、「人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団」でなければなりません。ちょうど、磁石にくっついた釘は、その釘も磁力を放つように、阿弥陀さまの智慧と慈悲を身に受けて、人々にまた、この阿弥陀さまの智慧と慈悲を伝えることのできる身となるのです。あくまで煩悩具足の身には違いありませんが、お念仏をよろこぶ姿やその積極的な生き方を、ほかの人が見た時、お念仏の生活は、こういうあたたかい世界なのかと知ってくれるでしょう。

この常行大悲の人生が、他人を蹴落として自分だけが幸福になろうとする現代社会の生き方から、「自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現」を目指す歩みとなるのであり、これこそが、副題として「私の歩む道」と表されたおこころではないかとうかがうところです。

「浄土真宗の教章（私の歩む道）」を理解するために

二〇一〇（平成二十二）年三月三十一日発行

編　集　教学伝道研究センター

発行人　浄土真宗本願寺派
代表者　橘　正信

印　刷　株式会社自照社出版